

日本近代語研究

4

—飛田良文博士古稀記念—

近代語研究会

【編】



ひつじ書房

「擬音語・擬態語」の音韻とイメージの関係について

ビジネス界の固有名詞は日本語表記を変える

「杖」にみる字体・用法の派生と字体の衝突

国定読本の文語文 ー量的推移と短歌の採用ー

春陽堂版『禽獸／世界』 狐乃裁判』管見

書簡文研究資料としての明治期女子用往来物

年齢層の言語の異同 ー明治期富山県議会速記録を資料としてー

条件表現の史的研究における「恒常性」 ー検証方法に関する一試案ー

仮名垣魯文の戯作小説における推量表現

西周の文法研究における「句 (Sentence)」

連用における例示と程度 ーコンナニ類の程度副詞化ー

樋口一葉の小説作品における時の助動詞について

中国語会話書に於ける「へ」と「に」 ー使い分けについての一考察ー

近代日本語の補助形式による可能表現について

近世初期俳諧の語彙と方言分布

『博物新編』の日本における受容形態について ー新概念への対応を中心にー

近世・近代における中国語の指示代名詞「這般」の受容について

『両禿対仇討』の仮名遣い

浅田 秀子 113 横
エツコ・オバタ・ライマン 129 横
笹原 宏之 127
貝 美代子 145
今野 真二 161
小椋 秀樹 175
平沢 啓 189
矢島 正浩 99 横
鶴橋 俊宏 205
服部 隆 219
島田 泰子 157 横
田貝 和子 233
園田 博文 249
申 鉸竣 171 横
安部 清哉 187 横
陳 力衛 199 横
羅 工洙 263
矢野 準 281

近世初期俳諧の語彙と方言分布

安部 清哉

キーワード：近世初期 俳諧 方言 口語 『日本国語大辞典第二版』

〔要旨〕 方言・口語を留めた国語資料として、近世初期俳諧・雑俳の利用は必ずしもまだ十分とは言い難い。語彙・意味・音韻・方言地理などを考える上で重要であり、さらに調査研究を進めることが必要である。『日本国語大辞典 第二版』や『日本方言大辞典』などの辞典類においても、古い文献例として一層の活用が望まれる。

1. はじめに

口語や方言を留めた資料として、近世の特に初期の俳諧・雑俳が注目されることは夙に指摘されている。

ここに私たちが、当面、語彙についてみようとするとき、貞門や談林の俳諧に、多くの俗語があらわれているというような事実が、きわめて意味深いこと考えられるのである。（『日本語の歴史5 近代語の流れ』1964年、172頁、平凡社）

俗語という狭い範疇のみならず、方言・口頭語の世界が投影してくる背景が、時代的にも、またその文芸史上にもある（米谷巖1981）。それは必ずしも上にある貞門俳諧や談林俳諧に限定されるものではない（後掲の用例はいわゆる蕉門と分類されるものからである）。

このように、近世俳諧における方言・口語・俗語に目を向け、日本語史の口語資料として取り上げる研究はこれまでも少なくないものの、その利用は必ずしもまだ十分とは言い難い。それらは、単なる語彙資料としてだけでなく、近世の地域ごとの音声特徴や意味的問題、中央語の伝播経路や拡散過程など言語地理学を考える上でも、さまざまな情報を提供してくれるものである。地方俳諧や連歌も含めて、それらは近世資料として重要であり、今後、さらに調査研究されることが望まれる。

また、それらでの用例は、文献例として古いものが少なくない。文献例が大幅に

増補された『日本国語大辞典 第二版』と比較しても、さらにその初出古例を溯るものが容易に見出せる。『日本国語大辞典 第二版』や『日本方言大辞典』などの辞典類においても、さらに一層の活用が期待される。

本稿では、近世初期俳諧における方言語彙を紙幅の範囲で取り上げてみることにする。2-(1)として、方言史研究、意味変化の研究への利用として1語例を取り上げ、また、2-(2)には、『日本国語大辞典 第二版』(以下、日国2)に文献例がないもの、あるいは、その文献初出例を溯るもの、その意味用法の記述を補うものなどを中心に、収集した語例を列举して簡単な解説を付すことにしたい。

なお、近世俳諧の資料として『古典俳文学大系』(集英社)所収の俳諧集を使用した。この大系によったのは、翻字に当たって基本的に原本での表記を確認できるように編集されているからである。第2章で「注」としたのは『古典俳文学大系』での注である。用例の表記は、ほぼ底本通りであるが、底本では、読みの便宜のため漢字と仮名を宛ててあるが、それについては次のようにした。

上記「大系7」の凡例(今回主に用例を挙げた『蕉門俳諧集二』昭和46年の凡例。本稿では「蕉門二」と略記)によれば、底本は、「7、必要に応じて、ふり仮名、ふり漢字を施した。この場合、底本にもとよりあるふり仮名・ふり漢字には〈 〉をつけて区別した。」(凡例)とある。本稿では、その場合はもとの表記で示し、宛てられたふり仮名・ふり漢字を直後の〔 〕括弧内に示した。

2. 近世初期俳諧の語彙とその方言分布

(1)クロ(畦畔)からグロ(叢)へ——クロ(周圏分布)とグロ(西日本内分布)の相補分布

もず〔鴟〕の子をそだてあぐ〔揚〕るや茨〔いばら〕ぐろ〔畔〕ゼッ素壺(女)〔ありそ海 元禄八1695 蕉門二(井筒屋)〕

イバラグロは、日国2に「(『ぐろ』は茂みの意)茨の生えているくさむら。うばらぐろ。むばらぐろ。いばらむろ。」とあり、虎明本狂言、日葡辞書の例が挙げられている。上の句例は文献例として古いものではないが、ここではグロとクロ(畦畔)との関係を問題にしてみたい。



このグロは、日国2の「グロ（壠）」に、「〔『くろ（畔）』の変化した語か）小高くなっている草むら。草木のこんもり茂っているところ。」とあるもので、浮世草子以降の例が挙げられている。このグロよりも、イバラグロの用例の方が古い例が挙げられているが、その問題は後述するとして、そこに語源としてクロ（畦畔）が疑問の助詞「か」付きながら示唆されている。ここでは、その語源説が、以下のように、クロとの意味的連続性と地理的相補分布、また、グロの種々の意味における周囲の分布からも支持できることを述べてみたい。

まず、クロとの意味的連続性であるが、グロには上の意味のほか、方言では「③石、草、薪（まき）、わらなどを積み上げたもの。④刈り取った稲を積み重ねたもの。稲むら。⑤石を積んでおく所。石の集まり。石地。」（方言欄）などの意味がある。これは、クロの「②小高くなった所。また、物を小山のように積み上げたもの。」という意味とほぼ同義ないし類義と見ることができよう。では、なぜクロがグロという別語形となり近接する意味にずれたのであろうか。その理由は、2語の方言分布を検討することによって推定可能となる。


クロの分布を『日本言語地図』L A J「アゼ」によって見ると、関東以北と北陸と北九州という周囲の分布を示し、その中央部にアゼが広がっている（図参照）。一方のグロの分布を見ると、西日本の近畿・中国・四国に偏っていて、ほぼクロの内側に相補的に分布している（中部東海には見られない）。つまり、叢のグロは、畦畔の意味ではクロが使われずアゼが使われるようになった地域でのみ使用されていることがわかる。これは、はじめ畦畔としてクロが使用されていたが、新しいアゼが畿内から西日本（九州を除く）に拡大したため、古いクロが畦畔の意味では使用されなくなり、意味的に連続する「物を小山のように積み上げたもの・ところ」の意や、ついで「小高くなっている草むら」の意へと意味をスライドさせ、それに伴って、語形も濁音形グロとなって生き残ることになった、と解釈できよう。

これまでのL A J「あぜ畦畔」の解釈では、クロ→クロ・アゼ併用→アゼに変わったという交替現象でのみ解釈されてきたものであった。上の点から見て、クロは消滅したのではなく、姿かたち（語形と意味）を変えて生き残りを図り、グロ（叢）がその変身した姿であると解釈できよう。その変身過程は、次のように、グロの意味的周囲分布に鮮やかに刻印されている。


「ク ロ」の周圈的分布と意味変化

あぜ
ク ロ 〈畦畔〉
  : 分布地域
 ● : 分布地点
 「グロ」

〔ク ロ 畦畔〕→①土石堆積物→②草木堆積物→③糞・灰燼〕

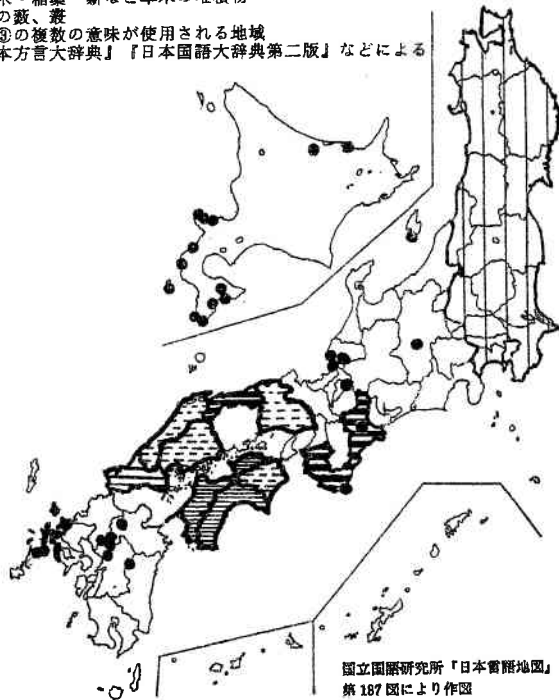
 : ①土・石などの堆積地・堆積物

 : ②草木・稲藁・薪など草木の堆積物

 : ③灰の灰、糞

 : ①②③の複数の意味が使用される地域

『日本方言大辞典』『日本国語大辞典第二版』などによる



グロの方言の意味を、日国2の方言欄によって次のように3つの意味に分けその分布地域を見てみると、畿内に近いほど、クロとは意味的に遠くなっていき、文献にもある《草むら》の意で使用され、LAJでクロが残存する九州に近いほど、語源であるクロの意味(日国の(2))に近い「(何らかの)物を小山のように積み上げたもの。小高くなったところ。」になっていることがわかる(中間地域は、意味的にも両方に通じる「草や稲を積み上げたもの」である)。

以下、その3つの意味に分けて、方言欄の意味ごとにその地名（およそ県単位で）を列挙してみる。

(1) 九州寄り——物を小山のように積み上げたもの。(山口)

「⑤石を積んでおく所。石の集まり。石地。島根県 広島県 山口県」

「⑥他の中の小丘。または開墾し残した小丘。島根県」

「⑦集落。山口県」

(2) 中間地域——草、わら、稲、薪など草木を積み重ねたもの。(香川、愛媛、高知)

「④刈り取った稲を積み重ねたもの。稲むら。島根県 徳島県 香川県 愛媛県」

「③石、草、薪、わらなどを積み上げたもの。兵庫県、四国、高知県、愛媛県、島根県、広島県、山口県」

(3) 畿内近辺——草むら。茨の藪。(和歌山、三重、鳥取)

「①草むら。奈良県 兵庫県 島根県 広島県 徳島県」

「②茨のやぶ。茨の叢生した地。三重県 和歌山県 鳥取県」

いずれの意味でも使われる地域（島根、広島）もあり、截然と分かれるわけではないが、草に関わらない意味は九州寄りにあり、逆に、畿内に近づくにつれ、つまり意味が新しくなるに従い、徐々に草に関するものに変化し、最後に「草むら」の意味になっていった様子を読み取ることができよう。

このような変遷から見て、クロが次第にグロ単独で「草むら」の意味を獲得していったことが推定される。文献例において、先にイバラグロが室町末期に現れ、グロはやや遅れて17世紀後半になり、一見順序が逆のように見えるが、イバラグロのような植物との複合語を経てから、草むらの意味を単独でも担うようになったことを示しているのかもしれない（語頭の濁音グも連濁によって獲得されたか）。もしそうであるなら、これは「複合語化（イバラグロ）による新しい意味（叢）の獲得」という意味変化のパターンでもあり、そのような意味的変遷を投影した文献出現順序とも解釈できる。

以上のような方言分布の解釈によって、グロ（叢）の語源を畦畔のクロかとする日国2の解釈は蓋然性の高いものといえよう。また、この事例によって、地形・場所を表わす単語（クロ）がそこによくあるもの（草・藪）を表わすようになるとい

う意味変化の興味深い一事実を得たことになる。

このようなクロとグロの相補的分布といい、グロの意味的周囲分布といい、われわれは、方言の分布に、その伝播と変遷の歴史が、奇しきほどに実に見事に刻まれ保存されているさまを、また新たに見出すことができるのである。

(2) 近世初期俳諧の方言語彙 (五十音順)

以下では、『日国2』に文献例のないもの(「文献初例」、その初出例を溯るもの(「文献古例」、記述を補う例などを五十音順に羅列する。

①アイゾリ(相剃)——文献古例

相剃[あひぞり]に菅笠請[うけ]ル秋の風 [陸奥衛 元禄十1697 蕉門二(京・江戸刊行)。前句は「穂ばかり切[きり]て残ス蜀黍[たうきび]]

日国2には、「互いに髪などを反り合うこと。」とあり、柳多留五九1812年の一例が挙げられている。

②イトガリ(糸屑)——文献初例

屑脱[ぬぎ]て糸がり(濁ママ)かくる秋寒し 雪(嵐雪)[後の旅 元禄八1695 蕉門二(井筒屋)]

イトガリでは、日国2にはない。ガリの見出しで屑状のものを表す該当項目があるが、方言欄のみで、文献例はない。近い意味のものを挙げると(方言地名省略)、「①茶が碎けて粉になったもの。②残り物。くず。③石灰殻。④液体の垢(あか)のこびりついたもの。⑤小便壺の内側に着く垢。⑦ふけ。」などがある。要するに屑・滓状のものを指して使用されているのがわかる。意味的に関連すると考えられるものは、新潟を含む西日本に偏る傾向が認められる。(そのほかの意では、東日本の例もあるが、擬態語・擬音語に起因する別起源と考えられるものである。例、「⑨板などにつく線状の傷。」や⑧⑩⑪。)

③オツサワラ——文献古例、美濃・尾張方言

花の陰甲[かぶと]を脱[ぬい]でおつさはら 荊口[後の旅 元禄八1695 蕉

門二（井筒屋）]

日国2のオッサワラには、「髪をふり乱した姿。」とあり、『尾張方言』（1749）の例がある。方言欄には、「岐阜県 加茂郡 郡上郡 愛知県名古屋市 知多郡」が挙げられている。注に「おっさわら。乱れ髪のこと。美濃・尾張地方の方言。」とある。

④カブラ大根——文献古例

七日へのかぶら大根 荊口 [けいこう] [後の旅 元禄八1695 蕉門二（井筒屋）]

日国2の初出例は、読本・椿説弓張月（後・十七回）1807-11である。

⑤キノコガリ——文献古例

中入 [なかいり] に見まふ和尚や茸 [きのこ] がり [太祇句選後編 安永六1777 中興俳諧]

日国2では、1782年の俳諧『続三寄誌』が初出例である。

⑥クゼル——文献古例、東日本偏在。

この月もおもひ [思] やくぜるうぐひすご [鶯子] 尾張 露川 [後の旅 元禄八1695 蕉門二（井筒屋）]

注では「轉る。ぶつぶつ喋る。ここは笹鳴（鶯の子）ががちゃッがちゃッと鳴くことを言う。」とする。

日国2では、③の意味として「③鳥が盛んにさえずる。」として、1722年の例がある。因に、①は「言い争いをする。痴話げんかをする。」で1782年である。方言欄では、ほとんど東日本に偏る。方言語形は省略するが、「①しゃべる。早口に話す。」では熊本県下益城郡以外は東日本、「②鳥が鳴く。さえずる。」でも、愛知県名古屋市と愛媛以外は東日本に偏る。

⑦コエツケウマ（肥付馬）——文献古例

供鐘 [ともやり] に糞付 [こえつけ] 馬のまじるらん 桐葉 [熱田穀宮物語 元

禄八1695抜 元禄九刊か 蕉門二（井筒屋）

日国2には「肥を荷としてつけた馬。」とあり、1773年が初出例としてある。

⑧スネバル——文献初例、スネビル（上二）あるいはスネハタバル（四）からの変
化形

そこらうち〔其所中〕すねばる梅や屋敷附〔やしきづき〕蓬山〔後の旅 元禄
八1695 蕉門二（井筒屋）〕

スネバルは、日国2にも『日本方言大辞典』にも立項されていない。意味的には
スネビル（上二）と同義で、その方言形であろう。スネビルは、日国2には「①ね
じれてまがっている。」（仮名草子の1612年の例から）「②ひねくれて強情をはる。
偏屈である。すねている。」（1622年）とある。方言欄はない。注には、「武家屋敷
の梅が近所中に威ばって意地を張る感じを言う意か。」とあり、このスネビルで解
釈しているようである。スネビルに「強情をはる」の意が重なりスネバルが生じた
ものか。スネハタバルが天理本狂言（日国2）にあるのでそれが略されたか。

⑨スマクジラ（隅）——文献初例

月よむと契る詞の隅〔すま〕くじら 大舟〔後の旅 元禄八1695 蕉門二（井筒
屋）〕

日国2ではスマクジラは「方言⇒すま（隅）」と空見出しである。日国2のスマ
の例中にはスマクジラの文献例はなく、その方言欄に方言語形としてあるのみで、
次の語形と地名がある。「◇すまくざ 富山県砺波 ◇すまくじ 新潟県中頸城郡
◇すまくじら 青森県上北郡 三戸郡 新潟県西頸城郡 富山県砺波 石川県加
賀 ◇すまっくじ 新潟県三島郡 刈羽郡 ◇すんくじら 鹿児島県鹿児島郡 肝
属郡」

方言語形（スミ・スマ）～クダ・～クラなども含め、青森県上北郡のほかは西日
本に多い。注にも「隅の方の意の方言。」とある。

⑩タンダモノ（タダモノ）——文献古例、周圈的分布（あるいは西日本偏在）

たんだ（濁ママ）もの梅も散行ケ百ケ日 イセ木端〔後の旅 元禄八1695 蕉門
(ママ)

二（井筒屋）]

タンダモノは、日国2にタダモノで「ひたすら。ただもう。」とあるものの方言形である。タダモノでは1705年が初例としてある。この句での意味は、方言欄にある「③引き続いて。次々に。いつまでも。」（島根、大分）や、「⑥いよいよ。ますます。」（九州諸県）の方が近い。それゆえ、日国2の見出し語の記述としては、この例を考慮すれば「次々に。ますます。」の意味を加える必要があるかもしれない。

方言欄にあるこのほかの意味用法も、意味的に関連するものであるが、それら全体の分布をまとめて見ると、東は青森県上北郡・山形県、西は島根県と九州に偏り、周圈的な分布を示す。しかし、次の点を考慮するとむしろ西日本に偏ると見ることもできる。

まず、山形県の使用地域（日本海側か否か）が考慮されるが、日国2で山形県とあるのは『山形県方言辞典』の例であり、『日本方言大辞典』にその典拠例があるのを見ると、「このおほこあただものきかなえ」（この子供はやたらに（性格が）きかない）である。地域が不明であるが、旧版日国のタダモノによれば、山形県米沢にタダモノ・タダモノニ（ひたすら等の意）の例がある⁽¹⁾。日本海側からの影響も考慮される。一方の青森県上北郡の例は、下北半島付近には西日本語形の影響もままたる。他の東日本例がないので、東北・九州・島根という周圈的な分布と解釈できるかどうか検討課題である。

上の句例は蕉門俳諧であるが、詠み手「木端」の右上に「イセ」とあり、伊勢の人であったことがうかがえ、この句も西での用例と見られる。

⑪ヅクナル——文献初例、西日本語

づくなりし中からついと行 [ゆく] 蜚 四睡 [続有磯海 元禄十一1698抜 蕉門二]

日国2には、語頭清音の「つくなる【蹲】[動] 方言⇒つくばる(蹲)」とあって、ツクバルの方言欄参照のかたちになっており、文献例はない。ツクバルは「かがむ・しゃがむ・うずくまる。」の意である。ツクバルの方言欄には多くの方言語形が挙げられ意味も多様で、それらは東西日本にまたがる。細かく見ると、ツクナルのよ

うにおよそ3音節目がナ行音であるものには地域的特徴があり、ほぼ西日本に偏る。東日本では隣接する長野県・新潟県や、東海道沿の静岡県・神奈川県であり、これらは西の語形が伝播したと解釈できるから、ナ行語形は、本来西日本方言と見ることができよう。

因に、ツクバルの日国2の文献初例は1767年柳多留二である。注に「づくなるはかがむの方言。」とある。

⑫ プンプムシ——虻以外の例として

咲[さき] そろふ梅の匂ひやぶんぶむし[虫] 唯行 [後の旅 元禄八1695 蕉門二(井筒屋)]

日国2には、プンプムシはないがプンプで「飛ぶ虫。あぶ(虻)。」として、浮世草子の1687年の文献例がある。この句は、虻というより梅の花と季節から見て、注に言う「蜂のこと。」と見る方が近いであろう。なぜなら、虻は「小動物などを食べるものと植物の腐ったものを食べるものがある。」(日国2)のもので、「咲きそろふ梅の匂ひ」は実ではなく「花」に寄り来る虫を詠んだものと解せるからである。

その点でも方言が参考になる。日国2の方言欄には、虻や蚊のほかに蜂とする地方(山梨)もあるからである。要するに、羽があつて飛ぶ虫を擬音語で広く呼んだものであろう。もっともこの例も「飛ぶ虫」という以外の決め手はないのであるが、日国2では用例の「吸れたる」から特に虻の名のみを挙げているので、ここでは古い例ではないが蜂の可能性の高い例として挙げておく。つまり「飛ぶ虫。虻、蜂など。」ととりたい。ちなみに『日本方言大辞典』には蜂の方言としてプンプ(山梨)の他、プンプン(山形)がある。

なお、同じような擬音語でもプンプンになると、黄金虫やテントウ虫などの甲虫類の方言例や文献例が加わる点異なる(プンプには甲虫類の報告が——偶然であるのか——見られない)。念のため言い添えれば、黄金虫もテントウ虫も季語は夏であるので、この句例も、やはり甲虫類を指さないプンプ(ムシ)の意と見られよう。

⑬ マエフリ(前振り)——文献初例、東北と中国・九州の周圈的分布

まへ[前] 振[ぶり] とれば能[よく] 似合[にあひ] たり 不白[継尾集 元

禄五1692か 蕉門二]

マエブリは、前掛け・前垂れの意である。日国2には、マエブリの②に、漁師の使用する前垂れである「②『マエソ（前葎）』に同じ。」とあるが、文献例はない。むしろ方言欄に多様な意味が見られる。まずマエソの意味を見ておくと次のようにある。「漁師が漁網を打ったり引いたりするときにつける藁・萱・棕木呂などでつくった前だれ、または前蓑。まえはぎ。めけら。まえすぶろ。前振り。」

さて、マエブリの方言欄には次のようにあるので、マエソのように漁師のみには限定されていない。その点で、「マエソに同じ」とのみするのはやや誤解をまねく。「漁や農作業時に付ける藁・萱～」とでも訂せようか。「①前垂れ。前掛け。盛岡青森県上北郡・南部 岩手県紫波郡 上閉伊郡 秋田県鹿角郡 長崎県諫早市 ◇まえおい 佐賀県藤津郡 長崎県南高来郡 ◇めぐる 岩手県岩手郡 ◇まえぐりこ 青森県三戸郡 ②農作業時に付けるわら製の前垂れ。鳥取県気高郡 ③腰みの。兵庫県美方郡 鳥取県八頭郡」注に「前掛け。東北方言。」とあるが、東北のほかか中国・九州の報告例があって周圈的分布をなすことがわかる。

⑭ムスギ（矛杉）——近世例として挙げる（日国2 - 『現存六帖』13世紀半ば）

嵐より雪に折くクジ けぬむ [矛] 杉 [すぎ] かな 介我 [或時集 元禄七1694 抜 蕉門二]

日国2には「矛（ほこ）の形をしてまっすぐ伸びた杉。また、長さや形が矛に似た若木の杉。ほこすぎ。」とある。『書言字考節用集』にもあるが近世での実際の使用例として挙げておく。『日本方言大辞典』にはない。

⑮モジリ（梁）——文献初例、東日本南部偏在

簞くモヂリ)の中の鮎 [あゆ] 落て行 [ゆく] 氷花 [或時集 元禄七1694 抜 蕉門二]

モヂリは魚を採る梁などの漁具である。日国2のモヂリには「水面近くを群れ泳ぐ魚がつくる波紋。」とあり、第2次大戦後の例が挙げられるが、該当する漁具の意味と文献例はない。方言欄に次のように釜や梁など漁具の例があり、東日本（の南部）方言と見られる。

「①竹で編んだ漁具。釜（うえ）。神奈川県。丹沢。山梨県。静岡県。②魚を捕る梁（やな）。神奈川県中郡。山梨県。静岡県志田郡・安倍郡。」

上の文献例を得たことによって、日国2での波紋の意は②と訂し、「①梁や釜などの漁具。」が追加されよう。

これらは容易に探し出せた用例のごく一部に過ぎない。近世初期の俳諧資料・雑俳資料群は、日本語史・方言史の資料として、今後もさらなる調査が必要と考える。

注(1) 日国2の方言欄は、多くは第2版で詳しくなっているが、このように、典拠資料の変更などもあって、地域名や方言語形例や使用文例が省略されて情報が少なくなっている場合がある。方言の確認の際は旧版や『日本方言大辞典』などを参照しておく必要があることがわかる。

参考文献

米谷 巖 (1981) 「近世俳諧と方言——初期俳諧を中心に——」『方言学論叢Ⅱ——方言研究の射程——』三省堂

『古典俳文学大系』1970-1972, 集英社

〔付記〕 本稿は次の科研費による研究成果の一部でもある。平成15~18年度科学研究費基盤研究(C)(2)「日本語方言形成モデルの構築に関する研究」(代表者:小林隆)

〔あとがき〕 飛田良文先生には、先生が責任編集された「ことばの探検シリーズ 全7巻」(1997、アリス館)中の『日本語の起源——日本語のルーツをさぐったら……』の執筆のお話をいただいたことがあった。先生は、あのような内容であってもわかりやすさと章の配列以外には何もおっしゃらず、まったく自由に書かせてくださった。やがてそこで述べたことは、専門的に言わばその根拠を示すために、6年後『国語学』54-3の拙論で取り上げて論じ、同2003年7月プラハでの第17回国際言語学会(国際言語学会会議)(CIL17)で報告することとなった(参照,<http://page.freett.com/abeseiya>)。

先生のお誘いがなかったならば、このテーマを掘り下げる時機をわたしは年齢的に逸し、そして、世界に問うてみようとする気持ちにも、あるいはならなかったであろうと思う。

学恩に深く感謝しつつ、先生のますますのご発展とご健勝を心からお祈り申し上げるものである。

(2003年 9月23日秋分)

編集顧問

森岡健二

池上秋彦

編集委員

飛田良文

湯浅茂雄

樋渡 登

鶴橋俊宏

小野正弘

陳 力衛

諸星美智直

服部 隆

日本近代語研究 4

— 飛田良文博士古稀記念 —

発行 二〇〇五年六月十三日 初版一刷

定価 四〇〇〇〇円＋税

編者 ©近代語研究会

発行者 松本 功

製版所 富士リプロ株式会社

印刷所 田中製本印刷株式会社

製本所 田中製本印刷株式会社

発行所 有限会社ひつじ書房

〒112-0002 東京都文京区小石川五―二―五

Tel. 03-5684-6871 Fax 03-5684-6872

郵便振替 00120-8-142852

造本には十分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、小社かお買い上げ書店にてお取り替えいたします。
ご意見、ご感想がありましたら、小社までお寄せ下さい。

ISBN4-89476-234-X C3081 P42000E

toiwase@hituzi.co.jp

http://www.hituzi.co.jp/